つながり、ひろがる、森のように育まれる駅ひろば

100 年後も豊かに暮らせるように、その想いから始まること。未来へとつなげること。

1 南阿蘇鉄道沿線地域のまちづくり戦略としての観光拠点化について

まちづくり戦略の柱である定住・観光の視点からの創造的復興の提案　観光　定住　交流

創造的復興に必要なものは、町民にとっての希望、安心感となるシンボル（復興）と、活動の拠り所となる場（定住）、そして高森の豊かな地域資源（観光）を創造的対話により結びつけていくことだと考えます。
そしてその主役は町民の皆さんです。
我々は、そのシンボルと場、対話により町が持続可能なしくみを提案します。

2 南阿蘇鉄道の起終点となる「高森駅」の防災拠点化

駅舎及び駅周辺広場における大規模災害を想定した防災拠点の考え方　防災

防災拠点として必要な堅牢さや設備を備えることはもちろん、
町の大黒柱のように安心感を与えるような駅舎を目指します。
防災時には、情報提供の場になりますが、日常的には防災教育・啓発の場としても、これまでの災害の教訓を伝えていく場を目指します。
駅周辺広場は、高森の資源（湧水）、鉄道というインフラの強みを活かした物資・人の供給拠点として整備します。

3 町の玄関口としての駅舎及び周辺整備

交流　定住

町民の生活を支え、まちの元気を生み出す交流拠点の考え方

高森町の玄関口となる駅舎本体は、コンパクトでありながらも、外部まで含めた空間を重ね使いすることにより、多様なアクティビティを受け入れる大らかさが大事だと考えます。
町民にとってとにかく便利で、目的がなくても集まりたくなるような駅、
特定の用途だけになるのではなく、みんなでつかい、話合いながら、いろいろな使い方ができる場です。
この場をつくること、運営することを通して、人々がつながり、まちが元気になることをめざします。駅前が活気に溢れることは、訪れる人、移り住む人にとって魅力的な町に感じられると思います。
＊この提案では、既存駅舎の半分ほどの規模の駅舎を想定していますが、
使っていく中で、数年後機能拡張により増築した場合を想定して描いています。

4 「みんなで考えるまちづくり」を実現するための手法

まちづくり

ワークショップ等、透明性を高め、広く町民の意見を取り入れるための具体的な手法の提案
→詳細は５枚目にて

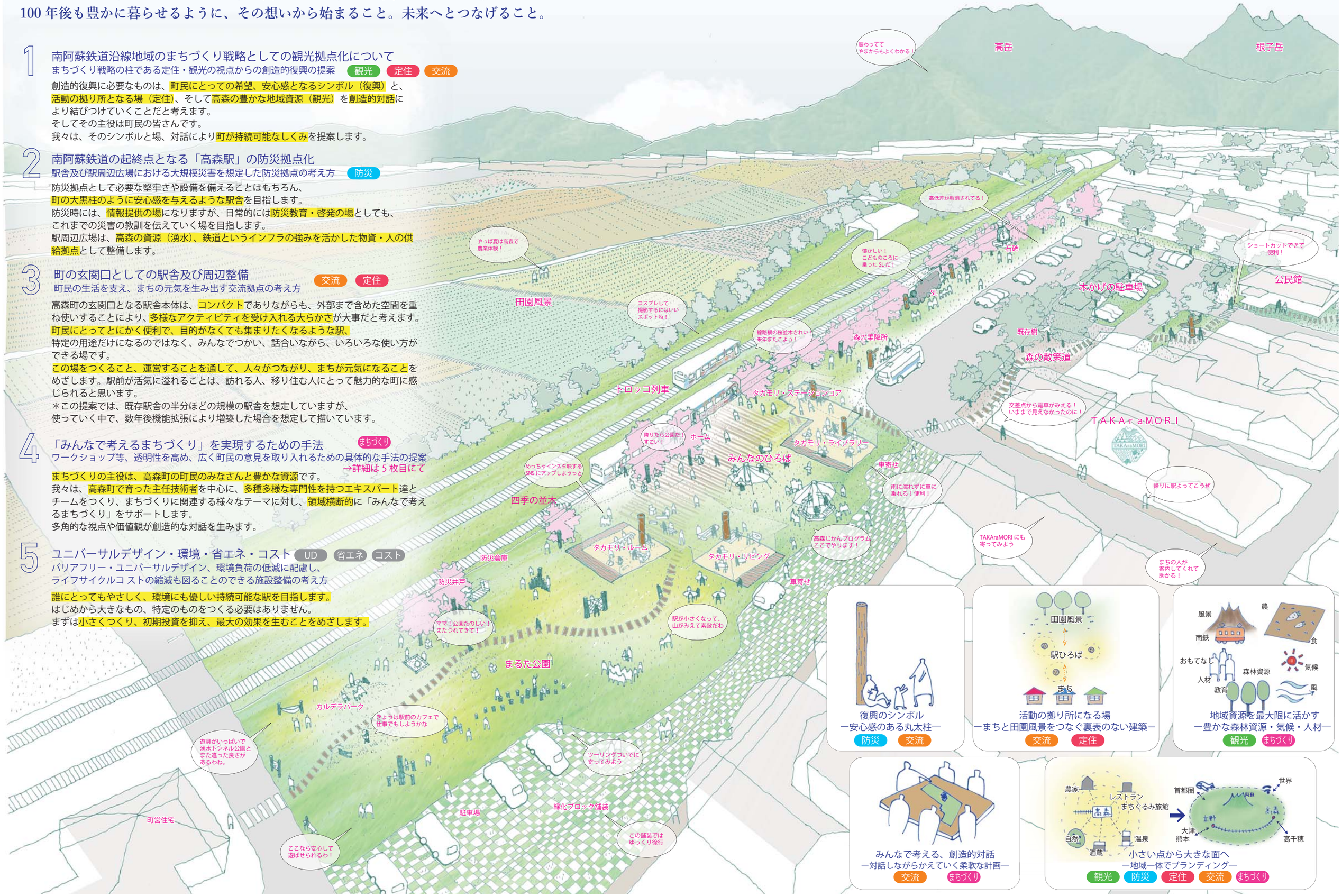
まちづくりの主役は、高森町の町民のみなさんと豊かな資源です。
我々は、高森町で育った主任技術者を中心に、多種多様な専門性を持つエキスパート達とチームをつくり、まちづくりに関連する様々なテーマに対し、領域横断的に「みんなで考えるまちづくり」をサポートします。
多角的な視点や価値観が創造的な対話を生みます。

5 ユニバーサルデザイン・環境・省エネ・コスト

UD　省エネ　コスト

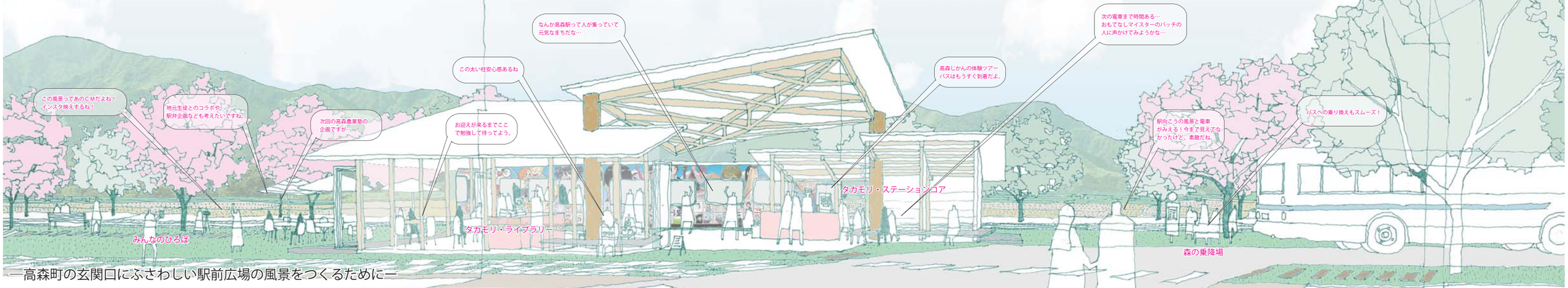
バリアフリー・ユニバーサルデザイン、環境負荷の低減に配慮し、
ライフサイクルコストの縮減も図ることのできる施設整備の考え方

誰にとってもやさしく、環境にも優しい持続可能な駅を目指します。
はじめから大きなもの、特定のものをつくる必要はありません。
まずは小さくつくり、初期投資を抑え、最大の効果を生むことをめざします。



自然と日常のにぎわい風景をつなぐ町の顔

町の顔 / 風景と線路と町をつなぐ / 日常・非日常の様々な活動の拠りどころ



―高森町の玄関口にふさわしい駅前広場の風景をつくるために―

①高森町だからこそできる風景の創出

高森町の特徴である「広大な草原風景と阿蘇への眺望」を活かし、訪れる町民や観光客、そして高森町で暮らす人々の心に刻む風景を創ります。南側にずらしたホームにより、電車を降りてすぐに、根子岳が望める印象的なアプローチをつくります。

②町と近い駅舎の配置

駅舎を線ではなく、点として、建築ボリュームを抑えたことにより、田園を借景として取り込み、南鉄車両と合わせて、町から一望できるようになります。電車や線路、田園風景が町から身近に感じられるようになり、高森駅ならではの駅舎の風景をつくり出します。

③地域の人々が絶えることのない穏やかな賑わい

駅を地域住民の日常生活の拠り所として捉え、観光客だけではなく、地元の学生、子供からお年寄りまで、気軽に訪れて時間を過ごす場を目指し、その賑わいが新たな町の生活風景を作り出します。

―「草原風景」と「賑わい風景づくり」を実現するための手法―

■まるた公園　定住　交流

子供が広い場所で走りまわれるような公園を設けます。丸太でつくった遊具を設置したり、カルデラのような微地形を設けるなど、大人でも楽しめる阿蘇地域ならではの風景と一体化した公園とします。

■四季のある自然の中の駅

観光　定住　まちづくり

敷地西側の並木と呼応して、ホーム沿いに桜並木を配置し、四季で異なる表情をもつ駅周辺をつくります。また、町民が日常的に訪れる憩いの場になります。

■ホームと一体的な“みんなのひろば”

観光　交流　UD

みんなのひろば（イベント広場）をホームとフラットな構えとし、一体的に整備することで、駅舎や広場の活動がホームに滲み出ます。観光列車と連動した催しは、電車との一体感を演出し、また、「電車を降りたら、そこは公園」という印象をつくります。

■風景に溶け込む

観光　定住

敷地西側の田園の緑を引きこみ、周辺の風景と連続させることで記憶に残る駅とします。

■記憶の継承　定住　交流

敷地内の樹形の良い樹木や、彫刻や石碑、SL や風祭の展示物も構内に再配置し、高森町の人々の記憶を継承します。

■防災倉庫　防災

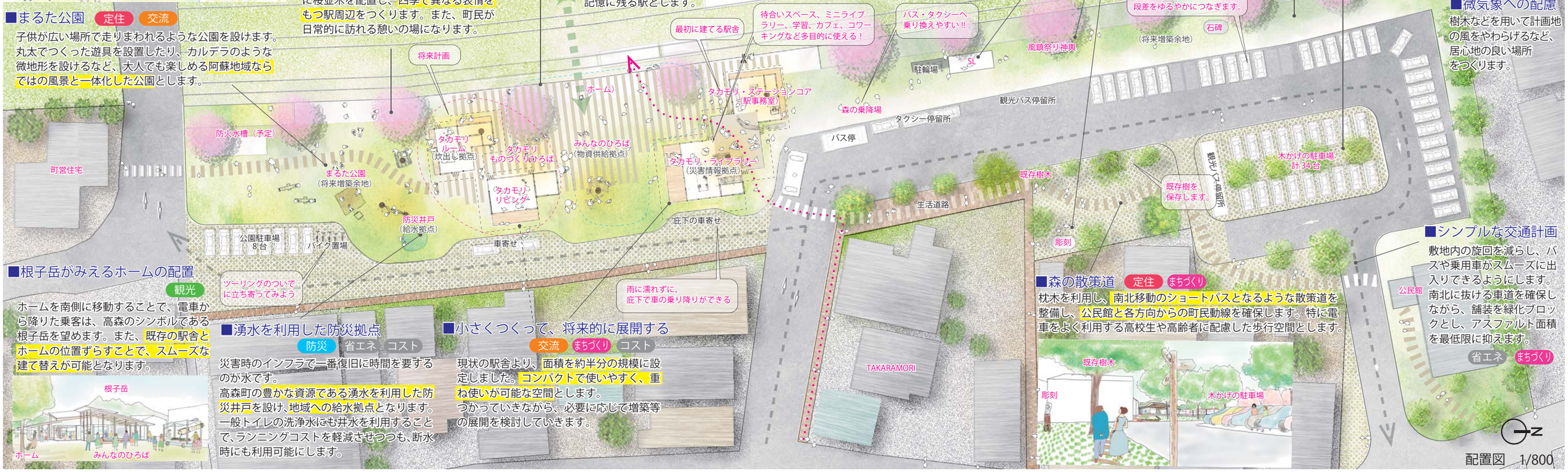
敷地内に防災倉庫を設置し、災害時町民の一時的な避難に備えます。

■木かげの駐車場　省エネ　まちづくり

ロータリー内周部の駐車場を緑化ブロック舗装とし、イベントでも使える設えとします。また、駐車場にも木を植え、木かげの駐車場をつくります。

■微気象への配慮

樹木などを用いて計画地の風をやわらげるなど、居心地の良い場所をつくります。



■根子岳がみえるホームの配置

観光

ホームを南側に移動することで、電車から降りた乗客は、高森のシンボルである根子岳を望めます。また、既存の駅舎とホームの位置ずらすことで、スムーズな建て替えが可能となります。

■湧水を利用した防災拠点

防災　省エネ　コスト

災害時のインフラで一番復旧に時間を要するのが水です。
高森町の豊かな資源である湧水を利用した防災井戸を設け、地域への給水拠点となります。一般トイレの洗浄水にも井水を利用することで、ランニングコストを軽減させつつも、断水時にも利用可能にします。

■小さくつくって、将来的に展開する

交流　まちづくり　コスト

現状の駅舎より、面積を約半分の規模に設定しました。コンパクトで使いやすく、重ね使いが可能な空間とします。
うかっていきながら、必要に応じて増築等の展開を検討していきます。

■森の散策道　定住　まちづくり

枕木を利用し、南北移動のショートパスとなるような散策道を整備し、公民館と各方向からの町民動線を確保します。特に電車をよく利用する高校生や高齢者に配慮した歩行空間とします。

■シンプルな交通計画

敷地内の旋回を減らし、バスや乗用車がスムーズに出入りできるようにします。南北に抜ける車道を確保しながら、舗装を緑化ブロックとし、アスファルト面積を最低限に抑えます。

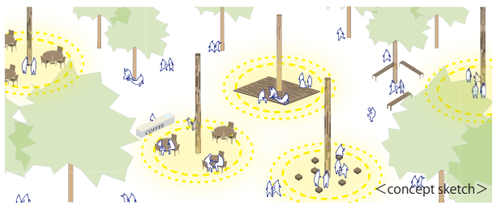
省エネ　まちづくり

配置図　1/800

丸太がつくる 拠り所としての これからの駅

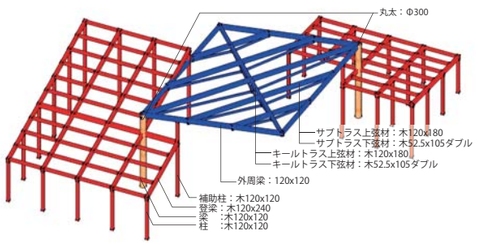
地域固有の建築 / 自由展開可能な形式 / 集いの場としての建築 / 裏表のない / 町の灯り / 気軽に立ちよりたくなる駅 /

—町民の生活を支え、心の拠り所となる場の考え方—



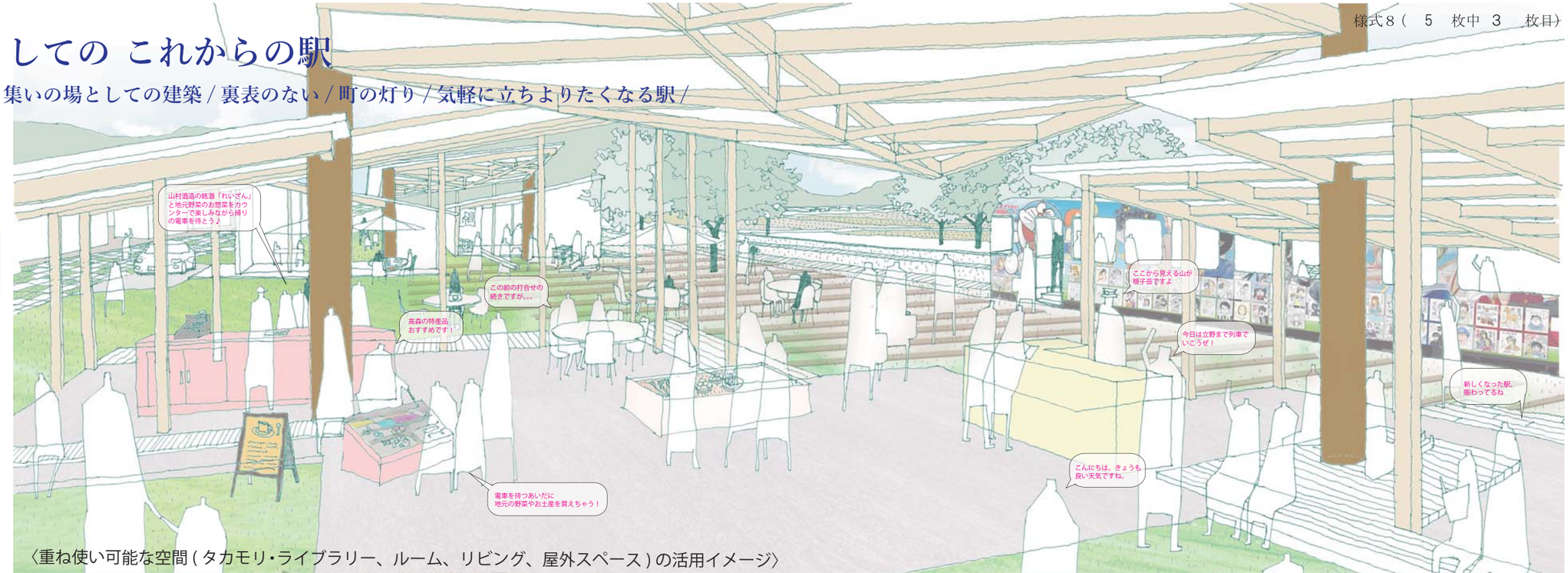
①阿蘇の丸太がつくる町民の集いの場

地域産の木材を活かした固有の建築を目指します。通常製材しても利便性の低いと言われている 300 ～ 400φ程度の丸太をそのまま柱として活用します。



②多様な機能に対応し、展開可能な建築形式

300φの丸太の周りに流通材で構成された耐震コアを取り付け、水平力を負担します。2 本の丸太で支えられた屋根は、トラス架構にすることで、柱を可能な限り減らすことができ、それによって生まれた空間は、フレキシブルで多様な使い方を可能にします。



〈重ね使い可能な空間 (タカモリ・ライブラリー、ルーム、リビング、屋外スペース) の活用イメージ〉

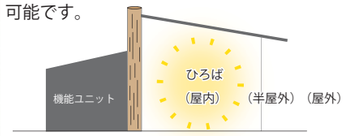
—「人、風景、活動の結節点となる場」を実現するための手法—

—将来を見据えた持続可能な構成—

■最小限の機能ユニット + ひろば

まちづくり　コスト

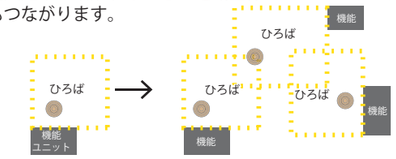
機能ユニットと「ひろば」を基本構成とします。「ひろば」は室内・半屋外・屋外からなります。このユニットを展開していくことで、高森駅だけでなく、様々な展開が可能です。



■柔軟で変更・展開可能な形式

まちづくり　コスト

現段階では未確定な大きさや機能は「丸太がつくる場」を骨格として、対話で決めます。建てる場所も自由です。丸太本数も自由で増築可能。維持管理が容易な計画です。丸太建築が増殖することが地域全体のブランディングにもつながります。



■丸太中心・裏表をつくらない

まちづくり　省エネ

内部をつくりながら、外部もつくる事で表裏のない空間を可能とし、いろいろな方向から人々を迎え入れることができます。設備スペースを小屋裏に配置することで景観に配慮しつつ、配管ルートの最適化を図ります。

■省エネ・ライフサイクルコスト・防災

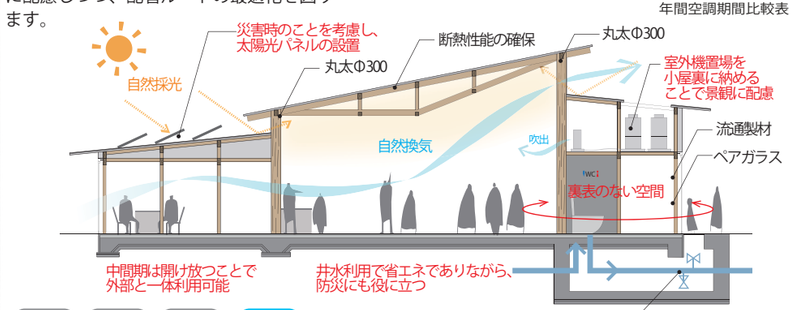
省エネ　コスト　防災

中水に井水を利用することで災害時でも水洗トイレが利用できます。中間期は自然換気を可能にすることで空調期間を減らし、県産ペレットを熱源として利用します。

凡例　夏期　中間期　冬期

一般	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
本提案	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月

年間空調期間比較表



UD　省エネ　コスト　防災

断面図 1/200

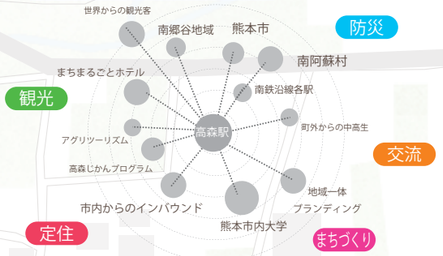
小さい点から大きな面へ

―人・交流・観光・防災・定住・モビリティのネットワーク構築―

高森駅を拠点に、徒歩圏の公民館、TAKAraMORI、観光交流センターから熊本市・国内外まで、町内のあらゆる資源をいかし、まちの未来につなげるネットワークを提案します。

―「高森駅」を拠点に広がる広域ネットワーク―

高森は南郷谷・南阿蘇の中心として近年再認識されています。熊本市内だけではなく、宮崎・高千穂・大分などの広域的なネットワークも視野に入れます。



―既存の輪に接続し、広げること―

高森町には高森じかんをはじめとした素晴らしい地域資源と人々のつながりがあります。我々の提案は、その可能性を更に広げていくことを目指します。

またこの町には魅力的なアクティブ・シニアの方々が生活しています。彼らを高森の重要な人材としていきいきと活躍してもらえるネットワークをつくります。

まちの未来につなげるネットワーク＜観光＞＜定住＞

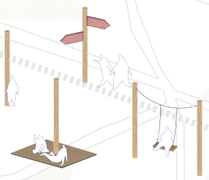
観光

■まちぐるみで観光を盛り上げる 観光

・駅を新たな拠点とし、既存の高森じかんのプログラムを更にサポートします。「風鎮祭」「高森にわか」町の様々な目玉イベントも、広場で田園風景や根子岳を背景に開催可能です。

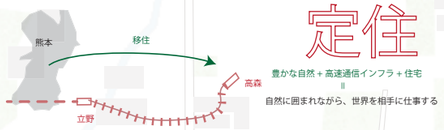
・町中にある空家を活かし、宿泊施設に改築することで、「泊まって遊ぶ」という新たな高森の楽しみ方を提案します。駅で「おもてなしマイスター」が観光客に鍵を渡すなど、交流を生み出しつつ、「まちぐるみホテル」で高森の魅力を更に増幅させます。

・「丸太柱」を始め、木材で作られた遊具、街灯と合わせ、サインとアートデザインで南鉄沿線全体で一体感を生み出し、より広域で総合的なブランディングを行うことで、イメージが伝わりやすくなり、SNS を通して世界に向けて発信します。



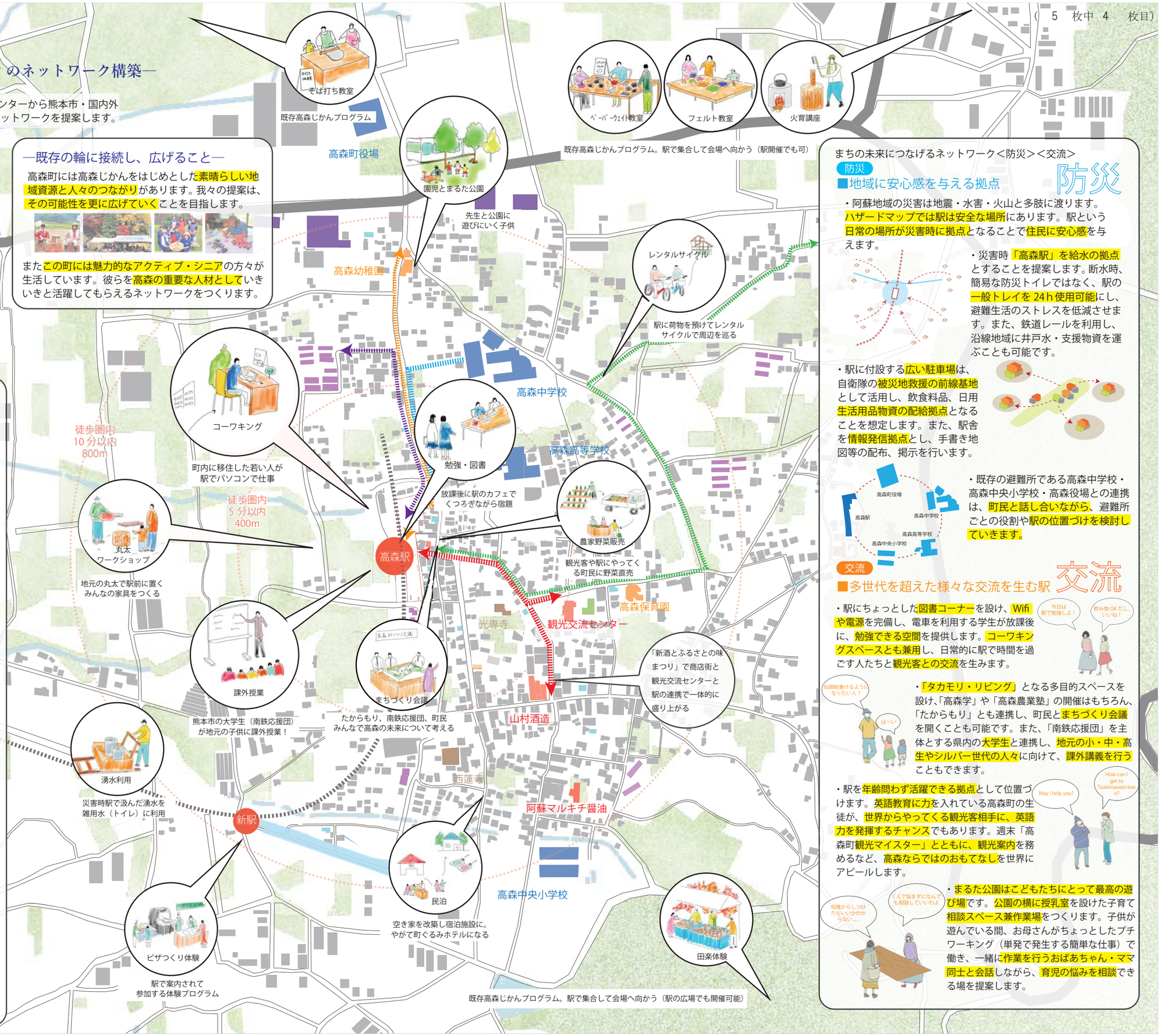
定住

■U- ターンしたくなる新しい高森暮らし 定住



・高森の自然と高速通信インフラは、若いノマードワーカー世帯にとって大きな魅力です。駅で「コーワキングスペース」を設け、徒歩圏内にある充実した町営・民間の賃貸住宅と合わせて、市内からさらなるインバウンドを目指します。

・高森駅を使いながら、必要に応じて様々な生活機能（ミニ集会所、小さな防災拠点など）を沿線に展開し、お互いが補完しあい、町の機能性を高めるとともに、駅間を移動しながら過ごす、高森の新しいライフスタイルを形成します。



まちの未来につなげるネットワーク＜防災＞＜交流＞

防災

■地域に安心感を与える拠点 防災

・阿蘇地域の災害は地震・水害・火山と多肢に渡ります。ハザードマップでは駅は安全な場所にあります。駅という日常の場所が災害時に拠点となることで住民に安心感を与えます。

・災害時「高森駅」を給水の拠点とすることを提案します。断水時、簡易な防災トイレではなく、駅の一般トイレを 24h 使用可能にし、避難生活のストレスを低減させます。また、鉄道レールを利用し、沿線地域に井戸水・支援物資を運ぶことも可能です。

・駅に付設する広い駐車場は、自衛隊の被災地救援の前線基地として活用し、飲食料品、日用生活用品物資の配給拠点となることを想定します。また、駅舎を情報発信拠点とし、手書き地図等の配布、掲示を行います。

・既存の避難所である高森中学校・高森中央小学校・高森役場との連携は、町民と話し合いながら、避難所ごとの役割や駅の位置づけを検討していきます。

交流

■多世代を超えた様々な交流を生む駅 交流

・駅にちょっとした図書コーナーを設け、Wifi や電源を完備し、電車を利用する学生が放課後に、勉強できる空間を提供します。コーワキングスペースとも兼用し、日常的に駅で時間を過ごす人たちと観光客との交流を生みます。

・「タカモリ・リビング」となる多目的スペースを設け、「高森学」や「高森農業塾」の開催はもちろん、「たからもり」とも連携し、町民とまちづくり会議を開くことも可能です。また、「南鉄応援団」を主体とする県内の大学生と連携し、地元の小・中・高生やシルバー世代の人々に向けて、課外講義を行うこともできます。

・駅を年齢問わず活躍できる拠点として位置づけます。英語教育に力を入れている高森町の生徒が、世界からやってくる観光客相手に、英語力を発揮するチャンスでもあります。週末「高森町観光マイスター」とともに、観光案内を務めるなど、高森ならではのおもてなしを世界にアピールします。

・まるた公園はこどもたちにとって最高の遊び場です。公園の横に授乳室を設けた子育て相談スペース兼作業場をつくります。子供が遊んでいる間、お母さんがちょっとしたプチワーキング（単発で発生する簡単な仕事）で働き、一緒に作業を行うおばあちゃん・ママ同士と会話しながら、育児の悩みを相談できる場を提案します。

みんなで考え、みんなでつくり、みんなでつかう

私たちがここに示した提案は、あくまでも１つの可能性にすぎません。今後、多くの方々との対話を元に具現化していくためのベースになる考え方の１例を示したものです。
プロポーザル後、早い段階で市民を交えたワークショップを行います。高森に住んでいる子供からお年寄り、農家の方、移住者や南鉄利用者、発注者など様々な視点から議論を行います。
我々は、多種多様な専門性を持つエキスパートチームとしてあらゆる領域を横断的に考え、議論をまとめ、みんなで考えるまちづくりをサポートします。

H30 年度 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 設計・建設工事 | 使用開始！ | 5 年後 | ・・・・・10 年後・・・・・20 年後・・・・・30 年後・・・・

つくる会議

下旬 契約

プロポ案 報告会

大きな模型を見ながら意見交換をします

与条件整理

高森らしさを持つ駅前広場プロジェクトスタート

重要な課題は比較検討で、合意形成をしていきます。大きな模型やCGを活用し、計画案を分かりやすく提示し計画内容の共有を踏まえた上での質の高い設計を実現します。

実際にこれまでにWSを通して意見交換をしてきました

実際に使う人の意見を聞きながらゾーニングをしていきます

WS1　WS2

配置・規模・ゾーニング検討、比較

アクティビティカードを並べて、どこの場所にどんなアクティビティが欲しいか、みんなで考えます

[WS1]高森をプロデュースしよう

「地元の駅弁」企画制作例
アートディレクター、南鉄応援団、地域再生アドバイザーとともに地域資源の可能性、高森町や南郷谷全体の魅力の再発見、新しい経済の在り方など、みんなで話し合います。

[WS2]どんな駅にしたい？みんなが思う理想の駅を話し合おう

駅を中心とした人々の活動の可能性を具体的に議論し、どんな使い方ができるのか、そのためにはどんな空間が必要なのかをみんなで話し合います。

どのような駅前が良いのか子どもたち・職員・利用者とイメージを共有します

まちの人たちのニーズに合わせた場所の在り方のイメージをみんなで考えます

中間 報告会

配置・規模・ゾーニング見直し、計画検討

WSでイメージした建物や全体のイメージに合うマテリアルを選びます

[WS3]植物を学ぶ緑の集い場として植栽する植物について、専門家と一緒に学び、リフレッシュできる憩いの場を形成します。

WS3

配置・規模・ゾーニング見直し、計画検討

町の皆さんからの意見を1つ1つ理解し、考えながら行います。

考えているイメージが予算と合うか比較、検討します

とりまとめ

予算に合うように設計内容の変更・調整します

金額に合うように最終案を決定します

最終 報告会

設計・建設工事

グランドデザインにより決定

意見交換

色塗りWS

この期間も市民との会話の場ワークショップを設けます

基本設計

トークイベント

実施設計

発注入札

家具WS

建築・外構工事

大学と連携

つかう会議

グランドオープン

▼オープニングイベント記念植樹等

使用開始時のオープニングイベントに記念植樹を行います。完成時を地域の人とともにすることで地域みんなの施設であることを共有します。

大学活動と連動し、地域密着型の活動を行います。地域の活動団体と協力し、高森駅周辺だけでなく、南阿蘇鉄道の駅全体をどう発展させるのか、南鉄応援団とともに盛り上げます。

実際の家具に触れながら、空間に身を置き身体と家具と空間の関係性、可能性についてみんなで話し合います。

南鉄応援団とともに市民サポート

まち全体がホテル化

町ぐるみホテル（アルベルゴ・ディフューゾ）地方の街の過疎化や、シャッター街の問題、空き家問題など、建築を取り巻く様々な問題に対して、解決策を考えます

2つのPDCAサイクルの利用

ACTION　PLAN　DO　CHECK　5年毎

CHECK　PLAN　ACTION　1年毎

P:計画 D:実行 C:評価 A:改善

PDCAサイクルを使用した計画とします。一度に大きな建築をつくるのではなく、まず小さい建築を1つ建て、使用しながら次の計画を考えます。

敷地内に展開

2期工事・・・

1期工事

1期工事の状況をフィードバックし、2期工事以降の計画に活かします。本提案のように、単純な建築の構成は、拡張しやすく、コンパクトでありながら多様な場の展開を可能にします。

まち全体に展開

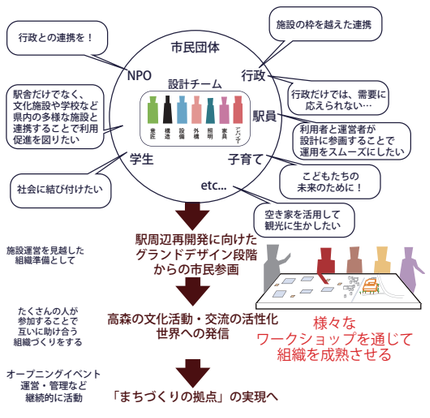
町や南阿蘇鉄道沿いに増殖していきます。町の機能性を上げるだけではなく、ブランディングなどにも役立ち、展開の可能性も持ちます。

湧き水トンネル駅開通
全線復旧開通（予定）

南阿蘇鉄道復興

H35-H39 南阿蘇鉄道全線復旧

高森えきまえプラットホーム



市民と行政が共有して進める設計体制

子どもたちや地域の方々の高森町の記憶を継承し新しい町の拠点へとつなげていくための積極的な意見交換を行います。新しい駅舎や集いの場としての拠点と街の持つイメージをみんなで共有し、創り上げていくプロセスです。設計プロセスをオープンにし、市民や職員、各種運営団体などとそれぞれ WS を行います。それらの WS は、「高森えきまえプラットホーム」に集約させ、建物のハードだけでなく、家具や細かな設え、運営などを見据えた WS とし、設計にフレキシブルに反映します。

模型に意見を貼る WS の例

被災地での支援経験を活かします

宮城県及び岩手県内で２年にわたり、住民や自治体とのやり取りやワークショップの開催、防集高台移転での土木コンサルタントとの協働の実績があります。ここ高森町ならではの状況に、幅広い体験から真剣に向き合います。

徹底した情報公開
高齢者でも読みやすい新聞をつくります

より広域の人々、より広範囲の理解協力を得るためには、効果的な広報活動も重要となります。検討協議会やワークショップについて、その場にいなかった人々に対しても整理した内容を公開し、透明性の高い計画とするために、例えば新聞、web を利用するなどの方法も考えられます。効果的な広報に役立つ素材の提示を行います。

実際に作成した新聞の例

協力事務所、地域住民との連携
内外に点在する、交流を生む家具

広場や建物内に、大小の家具を点在させます。家具は休憩スペースや読書スペースなどになります。素材や形については、地域の人と考え、一緒に作ることで、地域のみんなの施設である意識を共有するためのツールとしての役割を果たし、グランドデザイン時から完成後の利用において、市民の交流を促していきます。

家具ワークショップの活動の例

大学活動との連携
南鉄応援団と一緒に盛り上げる

南阿蘇鉄道の全線復旧を応援する地域市民団体である、南鉄応援団と協力し、「駅つなぎ、人つなぎ」活動に取り組んでいきます。南阿蘇鉄道の歴史や熊本地震の影響などの記憶の継承をするだけでなく、地元の熊本大学の学生も多いこの団体は、地域密着型に取り組むことができ、復旧作業だけでなく、これからのまちの在り方についても積極的に取り組むことが可能です。

南鉄応援団の活動の例